

られなかった。

b) 第2回目放流

後の潜水調査

放流点付近の

海底は、サンゴ
起源の岩と礫や

砂地で、前回の
放流点に比べて

やや砂地が多い。
植物はウミヒル

モヤホンダワラ
類が散在してい

た。水深は満潮
時に3.8mほど

で、放流時はほ
ぼ満潮であった。

放流点付近のハ
マフエフキ天然

幼魚の数は前回
放流時に比べて

かなり少ない
(図10, 11)。

放流直後の放
流魚の行動は前

回とほぼ同様で
あったが、今回

の方が頭を真上
に向けてるなど正

常位で泳げない
個体が多く分多

いようであった。
放流後1日目

は、放流点に約
400個体の大群

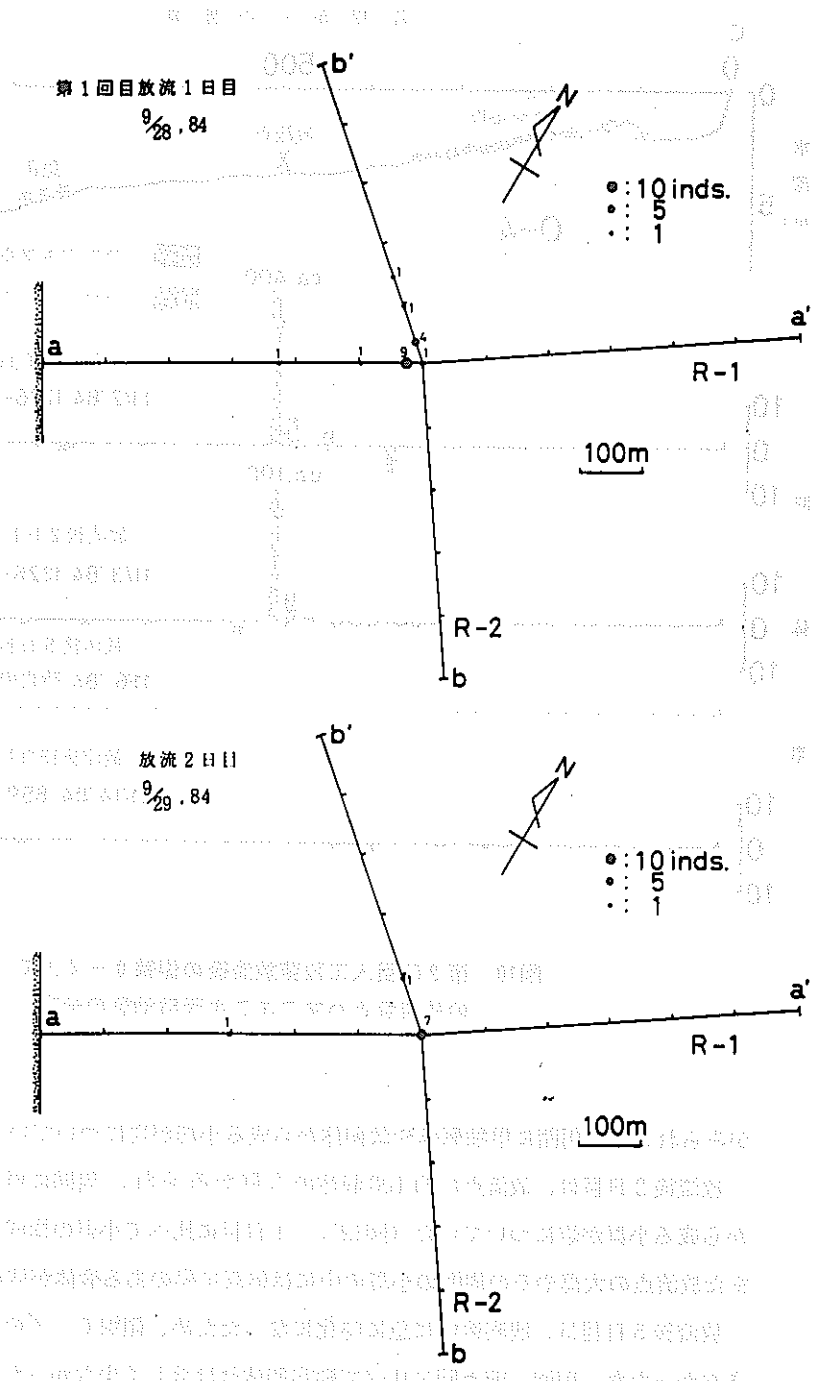


図9 第1回目人工種苗放流後の放流魚の側線上の水平分布 図中の数字は個体数。

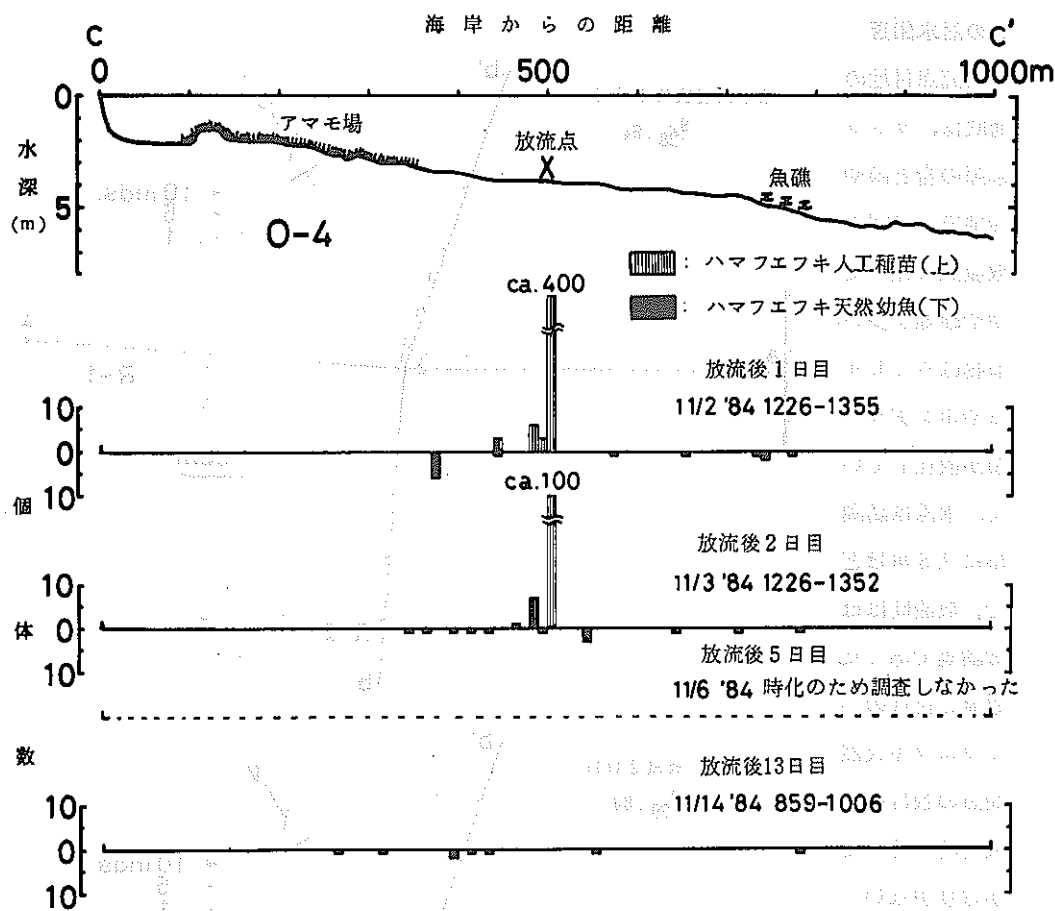


図10 第2回目人工種苗放流後の側線0-4上での放流魚とハマフェフキ天然幼魚の分布

がみられ、その周囲に単独個体や数個体から成る小群が岩についていた(図2)。

放流後2日目は、放流点に約100個体の大群がみられ、周囲に単独個体や2~39個体から成る小群が岩についていた(図12)。1日目に比べて小群の構成個体数が増加していた。また放流点の大群やその周囲の小群の中には体表に傷のある個体が観察された。

放流後5日目は、観察途中で急に時化になったため、側線0-4の一部と、0-4で観察できなかったが、前回、前々回に比べて観察個体数は著しく少なかった。1日目と2日目にみられた放流点の大群はなく、わずかに1個体が標識ブイ固定用のコンクリート・ブロックの下でみられたにすぎない。岩についている小群は群れの構成個体数が減少し(図12)、体表に傷のあるものが目立った。0-4線上では死亡した放流魚が観察され、この個体は体側の鱗が部分的

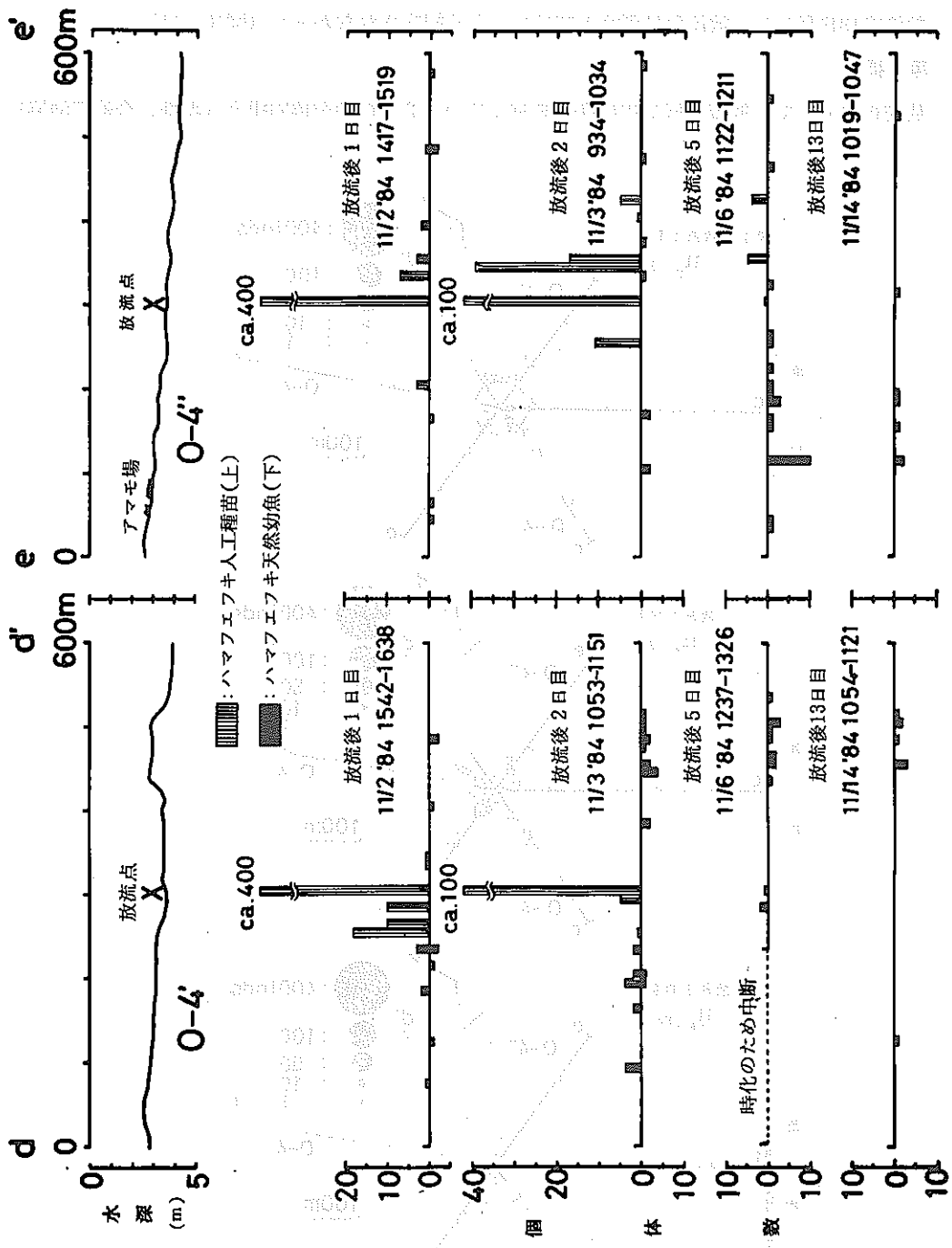


図11 第2回日人工種苗放流後の側仔0-4', 0-4'上での放流点とハマフエキ天然幼魚の分布